

## 平成 23 年度 8020 公募研究報告書抄録

研究課題： 在宅療養高齢者への食支援に関する調査研究  
研究者名： 菊谷 武  
所属： 日本歯科大学大学院生命歯学研究科臨床口腔機能学  
附属病院 口腔リハビリテーションセンター

### 目的

咀嚼機能の低下は高齢者の栄養状態に影響を及ぼす可能性が指摘されている。平成 22 年に行った在宅療養中の高齢者 716 名の調査（厚生労働省老人保健健康増進等事業）によると、咬合支持を失った者の低栄養を示すリスクは、天然歯において咬合支持を維持しているものに対して 3.2 倍であり、義歯によって咬合支持を回復していた者は 1.7 倍に低下していた（kikutani et.al,GGI,2012 in press）。本研究では、咬合支持が在宅療養高齢者の予後に与える影響について検討した。

### 方法

上記調査に登録された者のうち、東京都内に在住する 130 名のうち追跡が可能であった者 105 名（男性 39 名、女性 66 名、平均年齢  $82.8 \pm 8.8$  歳）の 1 年後の予後を調査した。このうち、在宅にて療養中の者を予後良好群とし、期間中に入院または死亡した者を予後不良群として検討した。検討項目は、年齢、性別、介護度、認知機能（CDR）、ADL(Barthel Index)、併存疾患指数、BMI、MNA-SF、嚥下障害の状況、咬合支持の状況、同居家族の有無、通所サービスの利用の有無、訪問看護利用の有無などであった。

### 結果

予後良好であった在宅にて療養中である者は 65 名（平均年齢  $82.0 \pm 8.3$  歳）、予後不良である期間中に入院の既往がある者 19 名（平均年齢  $80.6 \pm 9.8$  歳）、期間中に死亡した者 21 名（平均年齢  $87.1 \pm 8.3$  歳）であった。予後と有意な項目を示したのは、ADL( $p=0.034$ )、嚥下障害( $p=0.002$ )と咬合支持 ( $p=0.034$ ) の状況であった。また、1 年間の MNA-SF の変化との間にも有意な関連が認められた  $p=0.039$ )。

### 考察

本研究においては、MNA-SF と 1 年後の予後との関連は認められなかった。さらに、咬合支持の状況と 1 年後に測定が可能であった死亡例を除く者の MNA-SF の変化との関連は認められなかった。しかし、咬合支持の状況と予後との関連が認められたことから、天然歯による咬合支持の存在や義歯による咬合支持の回復は在宅療養高齢者に予後に影響を与える可能性が示された。